

### 3節 善い業は、御霊の働き

3-① 信仰者が善い業をする能力は、決して彼ら自身から出るのではなく、全くキリストの御霊から来るものである。

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの木が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」 ⑩

ヨハネによる福音書 15・4, 5

「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。」 ⑩

エゼキエル書 36・26,27

※カルヴァンは、我々の善き行いが、すべて主のものと理解すべきで、人間の功績として自負すべきものは何もないとして、次のように言う。

「我々の行いの内で称賛に値するほどのものは全て神の恵みであって、我々に帰すべきものが片鱗もないことは疑う余地なく、真実にまた誠実に事柄を認識するならば、単に功績についての自負のみでなく、功績という臆見すら消滅

するのである。私は言うが、善き行いについての賛美を神と人とで分け合うのでなく（これは詭弁家たちのすることである）、その全てを完全なまま少しも損なわずに、主のものとして守るべきである。人間に帰されるものは、そのものとしては善であったのに人が己の不潔によって汚し辱めたもの、これだけである。人間から来るものは、どんなに完全であっても何らかの汚点に汚されていないものはない。」（綱要）3-15-3

3-② 信仰者が善い行いをするためには、すでに受けている恵みのほかに、御旨にかなったことを意味し実行するようにさせる、同じ御霊の現実的働きかけが必要である。

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」 ㊦

ピリピ人への手紙 2・13

「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」

㊦

ピリピ人への手紙 4・13

「もちろん、独りで何かできるなどと思う資格が、自分にあるということではありません。わたしたちの資格は神から与えられたものです。」 ㊦

コリント人信徒への手紙 二 3・5

※カルヴァンは、善き行いにおける御霊の働きについて、次のように言う。

「主は人を滅びの淵から救い上げて後、子として受け入れる恵みによって御自身のものとして分ち置き、更に人を生まれ変わらせ新しい命に更新されたのであるから、今や人を新しく創造されたものとして、御霊の賜物をこれに満たしたもう。……信仰者は召された後に神によしとされ、その行いさえも顧みを受けるのである。というのは、主は御自身の御霊によって為された善き業を愛し、これを抱擁することなしには置きたまわないからである。」(綱要)3-17-5

「我々は生まれ変わらない限り、我々から良いものは何一つ出ず、われの再生は例外なく神からのものであるから、善き行いの極僅かな部分たりとも我がものと主張することはできないのである。」(綱要) 3-15-7

3-③ しかし、聖霊の特別な働きかけがなければ、どんな義務も果たさなくてよいかのように、怠慢になってはならない。むしろ、自分たちの内にある神の恵みの賜物を燃えたたせることに励むべきである。

「だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であったように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい。」 ⑥

フィリピの信徒への手紙 2・12

※カルヴァンはこの聖句を、善き行いに専念しつつ永遠の生命を瞑想することであると言う。

「彼ら(※主の民)が〈自らの救いの業を行う〉と言われるのは(フィリピ 2・12)、善き行いに専念しつつ永遠の生命を瞑想することを言うので

あって、他の箇所でも、キリストを信じつつ命を求めることについて、〈朽ちない食物のために業を行え〉と命じられる(ヨハネ 6・27)のと同じである。」(綱要)3-18-1

「主イエスは、御自分の持つ神の力によって、命と信心にかかわるすべてのものを、わたしたちに与えてくださいました。それは、わたしたちを御自身の栄光と力ある業とで召し出してくださった方を認識させることによるのです。……だから、あなたがたは、力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、……だから、兄弟たち、召されていること、選ばれていることを確かなものとするように、いっそう努めなさい。これらのことを実践すれば、決して罪に陥りません。こうして、私たちの主、救い主イエス・キリストの永遠の御国に確かに入ることができるようになります。」 ㊦

ペテロの手紙 二 1・3, 5, 10, 11

「しかし、あなたの御名をよぶ者もなく、  
奮い立って、あなたにすぎる者もいません。  
あなたは私たちから御顔を隠し、

私たちの咎のゆえに、私たちを弱められました。」 ㊧

イザヤ書 64・7

「それですから、私はあなたに注意したいのです。私に按手をもってあなたがたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。」 ㊨

ペテロの手紙 第二 1・6

「今、私がここに立って裁判を受けていうるのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。私たち十二部族は、夜も

昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。」 ㊦

使徒言行録 26・6, 7

「しかし、愛する人々よ。あなたがたは、自分の持っている最も聖い信仰の上に自分自身を築き上げ、聖霊によって祈り、神の愛のうちに自分自身を保ち、永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。」 ㊧

ユダの手紙 20・21

※ この節の善い行いと御霊との関係について、(註解)では、「御霊の特別な働き」が与えられるまで待つという考えの危険性を指摘して、次のように言う。

「善い行いをする究極的な動機と力は、われわれ自身の能力、すなわち内的力、によって獲得されるものではない。それは、〈全くキリストの霊によるものである〉。信者はキリストにある新しい被造物であるから、聖霊が彼の内に、神の御心を行いたいという新しい願いを創造するのである。われわれ自身の活動に対する御霊の関係については、非常に多くの誤解が生じている。本節は、自分たちの義務を果たすのに、われわれが〈御霊の特別な導き〉が与えられるまで待つことのないように、警告する。

一部のキリスト者は、御霊の働きは常に、知性と理性の行使を伴わない、衝動的で自発的なものである、と考える。御霊の促しを追求して内省的になり、自己に没頭して、結果としてはいささか狂気じみたことを行った信者たちの多くの例があることを、われわれは歴史と経験から知っている。

現実には、われわれは自分自身の感情や考えをのぞき込んでみても、神がわれわれに何をしよう望んでおられるのかを見いだすことはできない。このような点については、聖書のみがわれわれの導き手だからである。御霊は常に、神の言葉（御自身が靈感されたもの！）に調和する仕方で神の民を導かれる。御霊の思いをわれわれが知るのは、その御言葉においてであって、信者の内的生の衝動においてではない。」（註解）